

Conference Proceedings

「巨人」の場^{トポス}

古代オリエント・ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏
における巨人表象の変遷

-
- 日本中世英語英文学会第36回全国大会企画シンポジウム「ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人族表象の変遷」（ウェブカンファレンス）、2020年12月5日－15日
 - オンライン公開シンポジウム「『巨人』の場^{トポス}」、CISMOR（同志社大学一神教学際研究センター）主催、2021年11月6日
 - オンライン公開講演会、山中由里子氏「巨人の名残り——遺物をめぐる中世イスラーム世界の驚異譚と巨人」、CISMOR主催、2022年1月23日
-

同志社大学 一神教学際研究センター

目次

巻頭言		4
第1部 「巨人」を読む		
<i>rp'um</i> からレファイムへ ——ヘブライ語聖書の「巨人」表象とそのイメージは どのようにして成立したのか——	関東学院大学 高井啓介	9
ユダヤ教伝統における「外」なる巨人と「内」なる巨人	同志社大学 勝又悦子	26
Gigantes の運命 ——古代中世ヨーロッパの巨人伝承の変遷——	同志社大学 大沼由布	59
第2部 「巨人」を見る		
イスラーム写本絵画にみる巨人の表象 ——ウージュの絵画表現と図像の象徴性について——	龍谷大学 林 則仁	83
巨人の名残り ——中世イスラーム世界における巨人伝承——	国立民族学博物館 山中由里子	115
中世ブリテン建国史と巨人族討伐 ——『ブルート』年代記とロマンスにおける歴史的記憶——	立命館大学 岡本広毅	139
西洋中・近世における巨人表象とイマジネール ——聖人・野人・パタゴニア人——	太成学院大学 黒川正剛	165
執筆者紹介		190

巻頭言

古今東西、「巨人」は人々を魅了してきた。世界各地に「巨人」伝承がある。思い出したように「巨人」の遺物が発見され、過去のそして今なお潜んでいるかもしれない「巨人」の存在が噂される。ヘブライ語聖書（旧約聖書）、ギリシア神話、世界各国の神話に「巨人」が存在する。神話の世界のみならず、テレビ番組、ゲームにアニメ、映画、漫画、等々、サブカルチャー世界のなかでも「巨人」なる存在が闊歩する。日本の正義の味方と言えば一古の大魔神に始まり、ウルトラマンにしろ、マジンガーZ、ガンダム、エヴァンゲリオン……多くの場合、巨大な存在であり、彼らが戦う相手も巨大な存在であり、進撃してくる「巨人」もいる。アニメ世界の巨匠である宮崎駿氏のアニメ作品では、崩れ落ちる巨神兵、水やりを続ける巨神兵、闇を歩くデイダラボッチの姿が思い浮かぶ。ゲームの世界では、ギガンテス、タイタン、ゴーレム、ネフィリム……巨人がらみのキャラクターが飛び回る。そして、スポーツの世界ではしばしば「ジャイアント・キリング」なるフレーズが使われる。

この「巨人」への畏怖と憧憬のルーツと変遷の模様を古代オリエントから近世ヨーロッパにかけて、ユダヤ教、イスラーム世界も含めて、広く探るべく、以下、1-3の二つのシンポジウムと単独講演が開催された。これらのシンポジウムでの発表、講演をもとに改訂、修正された論考をまとめたものがこの論集である。

1. 日本中世英語英文学会第36回全国大会企画シンポジウム「ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人族表象の変遷」(ウェブカンファレンス)、2020年12月5日-15日開催、
2. オンライン公開シンポジウム「『巨人』の場(トポス)」CISMOR(同志社大学一神教学際研究センター)主催、2021年11月6日開催
3. 山中由里子氏オンライン公開講演会「巨人の名残り—遺物をめぐる中世イスラーム世界の驚異譚と巨人」CISMOR主催、2022年1月23日開催

大沼由布氏(同志社大学文学部)の呼びかけで開催された1は、山中氏、大沼氏らが進めてきた異形なる存在、驚異なる存在の系譜、文化史についての横断的研究に端緒がある。この壮大な研究の成果については、山中由里子編『〈驚異〉の文化史—中東とヨーロッパを中心に—』名古屋大学出版会、2015年、山中由里子・山田仁史編『この世のキワ〈自然〉の内と外』勉誠出版、2019年他参照されたい。1のシンポジウムでは、異形なる存在の一端として、中世英文学において、敵対者・不信心者といった「他者」の表象でもあり、また「善」なる表象として登場する「巨人」伝承について、勝又がヨーロッパ

内の他者であるユダヤ教文学における「巨人」の系譜について、大沼は『マンデヴィルの旅行記』他旅行記、博物記を中心に、また、山中はアラブ・ペルシア文学における「アードの民」について、岡本は『ブルート』年代記を中心にして、巨人像の変化に着目した。

このシンポジウムでの成果を更に拡大する価値があると考え、翌年、同志社大学一神教学際研究センター主催で開催したのが2のシンポジウムである。古代オリエント世界から、近世ヨーロッパまで地域、文化、時代を拡張し、碑文、文献、美術表象を通して多角的に分析し、「巨人」の置かれた「場」——物理的場所、付された役割も含めて——その「場」の変遷を幅広い視点から考察する機会とした。

文献における「巨人」論が主体となる第1部『『巨人』を読む』では、ヘブライ語聖書世界の巨人表象がその後の巨人表象の重要なソースになっていることを踏まえ、聖書的前景となるオリエント世界での巨人論を高井が論じ、また、勝又がユダヤ教解釈伝統での内なる「巨人」としての「ゴーレム」も加えてユダヤ教における「巨人」の展開を議論し、大沼はヨーロッパ世界の巨人論の基盤として、聖書系巨人論とギリシア神話系巨人論の系譜を整理し、中世百科事典での巨人の位置づけを検証した。図像分析が主体となった第二部『『巨人』を見る』では、イスラーム世界の様々な「巨人」をモチーフとする絵画表象からイスラーム世界における「巨大」に見せることの意味を林が問い、また岡本は、中世ブリテン建国史におけるコロニアルな歴史と巨人族との関係性を掘り下げた。さらに、黒川は、当シンポジウム全体を俯瞰的な視点から、中世・近世のイマジネール（想像界）における三つの巨人表象——聖人・野人・パタゴニア人——の比較を通して、巨人の立ち位置である場（トポス）について検討した。また、山中は、3の講演会にて、中世イスラーム世界の驚異譚において、巨大な骨や遺跡の発見が巨人族の伝承と結び付けられた事例から、そこに見られる当時の人々の宗教観と人類史観について触れた。

本論集は、上記に概要を紹介した1-3での口頭発表、講演を更に精査し、発展させた論考になっている。詳細は各論考を参照されたい。また、2のシンポジウムでの部会区分を踏まえ、本論集も、「巨人を読む」「巨人を見る」の二部構成とした。

すでに、「巨人」論はサブカルチャーをはじめ、様々な分野で展開している。しかし、往々にして特定の時代や地域、特定のジャンルに限定された議論にとどまっている。しかし、今回、3度にわたる「巨人」論の場を展開することができたおかげで、本論集は、古代オリエントから近世ヨーロッパ社会にいたるまでの、長いタイムスパンと、広大な領域、そして、オリエント学、ユダヤ学、イスラーム学、英文学、ヨーロッパ史、図像学等の学問ジャンルを超えて、「巨人」が闊歩する様相を提示することができたのではないだろうか。ヨーロッパ世界の「巨人」譚の根底にある聖書世界に端を発する「巨人」、そして、ギリシア・ローマ世界の「巨人」譚が、いかにユダヤ世界、イスラーム世界も巻き込んで、発展していくのかをみるのでないだろうか。そして、異なるものである「巨人」を介して、逆に、時代、地域、宗教、文化を超えた世界が形成されている。

本論集の中で、頻繁に相互言及しあっていることもその証左であろう。それは、また、異なるもの・威なるもの・他なるものとされてきた存在が「私たち」に果たす役割を示唆し、さらには、「巨人」と「私たち」の関係、多様な世界についても思索を深めることにつながる。

上記、2、3のシンポジウムの開催にあたっては、同志社大学一神教学際研究センターが主催し、事務局においては多大な労をはかっていただいたことに心より感謝したい。本誌の編集、編纂、印刷にあたっては、リトン社大石昌孝氏に細心の注意を払ってご尽力いただいたことに心からの感謝を申し上げる。シンポジウムの実行、本誌の作成にあたっては、著者の皆様の甚大なるご協力を頂いた。早々に原稿を用意して頂いたにもかかわらず、ひとえに編者の怠慢ゆえに刊行が遅れたことを心よりお詫びする次第である。とりわけ本学の同僚でもある大沼氏には有益な助言を頂いたことに感謝したい。

2、3のシンポジウム開催にあたっては、JSPS 科研費 20K0083（「創造の業」の系譜—ユダヤ教における「自由」と「偶像」の総合的研究、研究代表者勝又悦子）、JSPS 科研費 17K02522（ヨーロッパ中世における博物学的知識の伝承—中東及び古代・近世との関わり、研究代表者大沼由布）の助成を受けた。また、本誌の刊行にあたっては、JSPS 科研費 20K0083 の助成を受けている。

2023年3月

『「巨人」の場』^{トボス} プロシーディングス編者
勝又悦子